鈴木六林男・茨木のり子における森鷗外

清田文武

一　鈴木六林男における鷗外

㈠　鈴木六林男と山口誓子・西東三鬼

大正八年（一九一八）大阪府生まれの俳人鈴木六林男（本名次郎）の森鷗外に対する文芸的反応として、関係句を取り上げ考察してみたい。それでまず必要と思われる範囲で六林男の句作活動を瞥見することとする。

六林男は昭和十一年（一九三六）十七歳当時、俳誌『串柿』の加藤しげる・永田耕衣の選句欄に投句し、荻野雨亭からは山口誓子の『黄旗』（龍星閣、昭和一〇）を借りて筆写したという。[1] 誓子は「序」において、「私は定型俳句を、そしてその正統なる発展としての新興俳句を飽くまで守備し」ようとするとの態度を明らかにしていたが、そうした先進に六林男は傾倒し、後年の昭和二十六年伊勢鼓ヶ浦に西東三鬼と共に訪ねた際、「誓子三鬼遊ぶや春の鴨遊ぶ」の句を獲ている。誓子は高浜虚子に師事した後、水原秋桜子の「馬酔木」に参加し、戦後間もなく『天狼』を創刊主宰した俳人であること改めて記すまでもあるまい。三鬼はその誓子からつとに影響を受け、「先生」と呼ぶことになったが、『天狼』でも活躍した。一方六林男は「京大俳句」に入って以後三鬼に就いたけれども、師の方ではこの弟子を「句友」と呼んでいる。六林男も『天狼』に入るが、その句風・句法を理解するには、右の二人を視野に入れておく必要があろう。六林男の鷗外関係の句の特色や周辺的状況が見えて来るところがあると考えるからにほかならない。

三鬼は、昭和十二年当時、いわゆる新興俳句に「知性」を与えたのが新興俳句運動であったと述べ、句の内容と形式とについて考察している。[2] 前者に関しては「無季俳句」「リアリズム」「知的美」の三つに分けて論じ、新興俳句運動に向かっていた誓子の主張を踏まえて、青年に無季俳句を作るよう呼びかけ

ピストルがプールの硬き面にひゞき　　誓子

を挙げて、そこに一つの拠り所を見たのであった。「俳愚伝」（『俳句』昭三四・四―三五・三）の中では、

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る　　誓子

を引き、「季題という濡れた叙情に馴れていた俳句の分野で、この作のもつ意志は、全く新世界の発見であった」と回想している。[3] 無季俳句の確立を目差していた、いわば実験時代にあって、「乾燥した、男性的意志の表現は、超季感となって、私を圧倒した」と打ち明け、その即物的な句法に感動し、そこに「ふてぶてしい思想」を読み取ったのであった。

三鬼の誓子への傾倒は、『凍港』（素人社書屋、昭和七）に遡り、昭和二十年の「河黒し暑き群集に友を見ず」といった句にも現れている。昭和三十七年（一九六二）五月雑誌『俳句』が三鬼追悼の特集を組んで十句を問うたアンケートに師の誓子は、

水枕ガバリと寒い海がある　　三鬼

二〇〇四・一一・三〇　受理

寒燈の一つ一つよ国敗れ　三鬼

の二句を劈頭に挙げたのであった。三鬼の句風の二傾向を示すごとくである。同じアンケートに六林男は

戦友を焼きピストルを天に撃つ　三鬼
水枕ガバリと寒い海がある　三鬼

をもって応じている。第一句に誓子の掲出句に相通ずる感性のあることは争われない。昭和十四年三月『俳句』に投じた作であり、回答にこれを最初に置いたところに、この弟子らしい選択があった。一句はニュース映画によったもので、片仮名表記を採り、「機関銃熱キ蛇腹ヲ震ハスル」、「機関銃地ニ雷管ヲ食ヒ散ラス」と、作動する無機物を比喩的に表現することで生動した作も発表していた。こうした句に対しては、いわゆる戦火想望句として現実性の問題を指摘し、疑義と批判とを提出する向きもあったが、過酷・悲惨な戦場を体験した六林男が、まず「戦友を――」を挙げたのは自然の勢いであった。無季の句であり、自らも「霧寒したそがれて友を焼きに行く」、「夕焼へ墓標たてもう汗も出ない」などと吟じていたからである。六林男の句を並記すれば、詠みぶりに通うものがあり、二人のつながりの一端が推知される。

泥濘となり泥濘に撃ち進む　（『旗』）　三鬼
泥濘をゆき泥濘に立ち啖ふ　（『定本　荒天』）　六林男
右の眼に大河左の眼に騎兵　（『旗』）　三鬼
右の眼に左翼左の眼に右翼　（『悪霊』）　六林男
おそるべき君等の乳房夏来る　（『夜の桃』）　三鬼
緑蔭を君の偉大な乳房来る　（『王国』）　六林男

ちなみにアンケートで三鬼の上掲句から選んだ人と作とを記すと、平畑静塔は「右の眼に大河――」、永田耕衣は「おそるべき――」であった。誓子の「夏の河――」の余響を感じさせる句を六林男に探すと、「風の中困憊の赤き河流れ」、「負傷者のしづかなる眼に夏の河」その他少なくない。実況を捉えたもので、後者については、「戦闘はまだ完全に終っていなかった。戦傷者の眼には、〈わが事おわれり〉の安らぎの戦友に対して負傷したことについての愧いがあった。太陽は照りつけていた。大陸も奥地の名もない河は輝いて流れていた。この負傷者は二時間後に死んだ。」と自作自解しており、昭和十五年中国湖北省での作という。[4]

このような句の世界を示していた俳人は、第三句集『第三突堤』（風発行所、昭和三二）の「後記」で、「自分の歴史」を「社会の歴史」に結び付けること従前のとおりでありたいと述べ、俳句を始めて十数年、この間新興俳句の先輩、三鬼や『天狼』その他の先輩の存在が大きかったと回顧し、同世代の人たちからも激励を受けたことをも記して、感謝の念を表す。そして、「日本文学の中では遅れたものとされている俳句を通じて僕は日本文化の土性骨と現実に常時接触している思いだ」と、以後の句作の姿勢をも表明していて関心を引く。

二

㈠　『螺線』第八冊の鈴木六林男

遡って昭和十五年四月発行の俳誌『螺線』第八冊を取り上げてみると、総ページ二十二、表紙上方には緑の地に白ヌキの誌名が横書きに円と直線とのデザインの文字で印され、下方にも緑が幅広く波形で押されてある。中間の地には斜めで二行に「鈴木六林男／入営紀念号」と銘打ち、その両脇から螺線によって筆墨でこれを挟み、見開きには「袂別」と題し祝いの言葉を述べ、「六林男よ」と呼びかけて鼓舞する一文を掲げてある。

君のかゞやく青春はこれからひらくのだ。炸烈する砲火をあびて、血の海に浸つて、君のその熱情が爆発点に達するだろう。そのときこそ君の詩魂が根底からゆすぶられるときであり、真実の詩が生れるときなのだ。

われらはその尊い成果に期待する。

われらはこの機会にのぞんで君にいふところは「六林男よがんばれ、しつかりやつてこい！」たゞそれだけだ。

おゝ六林男は突撃する――血みどろの芸術境へ――われらもまた孤城螺線を死守しよう。（吉郎）

編集者和田吉郎は、出征する句友を励ますと同時に、「真実の詩」、新しい芸術境の開拓を期待しているが、時局からすると、微妙な書き方をし

たところがある。

一体六林男は、前掲のような句を当初から示したわけではなかった。初期に属する句で、『串柿』等に発表の「ふと顔をあぐれば柿の吊しあり」、「蘆ゆれて夜釣の人の帰り行く」といった作があり、やや腕もあがってからは

灯を消せば窓一つあり冬の月　六林男
春暁や未だ雞舎の静かなる　六林男

という句も吟じていた。[5] 温雅な詠みぶりの中に、感覚の鋭さを現した佳句で関心を引くものの、斬新さにはいまひとつ乏しい。けれども、やがて「碧い海」の詞書きで

傷兵にぼう〳〵と花の風が吹く　六林男
散る桜傷兵に碧い海である　六林男

の句も案じることになる。及ばないが、当時注目された篠原鳳作の新風を想起させるものが感じられる。『螺線』第八冊の中林燁生によれば、これが戦場に出で征く友人が俳壇にたたきつけた有季の最後の句であった。[6] こうした感性から、暗い時代に転げ落ちる社会の空気を、批判的、反抗的に無季の句で写し出すことになる。大陸での戦争が泥沼に入って行く様相を呈したころ、優れた作とは言い難いが、発想として

慰霊祭了りぬ皆ンな夕日のまへ　六林男
慰霊祭了り脚下より昏れぬ　六林男

と詠むことは、六林男にはそれほど困難ではなかったであろう。しかし、『定本　荒天』（ぬ書房、昭和五〇）や『鈴木六林男全句集』（牧神社、昭和五三）にこれらの作物は収録されていない。この二書に「兵となるのか、愛憎の書を塵に堆み」（傍点引用者）と収めた句は、初めは「兵となる愛憎の書を塵に堆み」であった。戦後上梓の句集の一句は、字余りにし、複雑な心中を屈折した形で表していて、批判性をより強めた観がある。

『螺線』第八冊には六林男の「親しき闘争――ノートの端より――」が掲載されている。アフォリズム風の論であって、「世の中で詩人ほど哀れなる者はまたとない。彼はなぜ物事を深刻に且つ執拗に探索しようとするのだらう」といった行文も見える。芸術家が危険視されないような時代の到来を願う心を仄めかせ、著名な軍人・政治家・実業家等の成功談よりも、叛逆者・大盗・殺人鬼等の生い立ちを聞かされ、また読む方を好むと打ち明け、その理由について、後者がより「浪漫的」であるからと述べてノートを結んでいる。後年の姿勢をも窺わせ、『夜盗派』（昭和二七・七）創刊の一事も思い合わせられる。反骨と叛逆、抵抗の詩人の姿を感じさせるが、三鬼は、その風貌に痛ましさを感じさせるところのあることを記したことがあった。[7]

この年「京大俳句」の同人静塔が二月、三鬼が九月に検挙され、『螺線』も押収され第八冊をもって休刊のやむなきに至った。このことを六林男が知ったのはずっと後のことになるが、巻頭に置かれた六林男の「入営以前」の二十四句の次には、加才葩瓜子の「鉛筆を握った肖像――鈴木六林男を送る――」があり、中林燁生の「戦争（其ノ二）」、松原碧流子の「ビルの影」、赤坂喬介の「鈴木六林男を送る」、山田凡楽の「こんなこゝろ」、中村草史の「空虚」、加茂孟浪子の「三句」及び和田吉郎の「不満」等が並ぶ。時局を撃つ同人誌の句風を示すため一句ずつ引こう。

すみれ野をものいはぬ兵となりにゆく　加才葩瓜子
憲兵のピストルを欲りぬくき夜　中林燁生
ビルの影従隊の兵黙とゆく　松原碧流子
勅諭を口すざむ彼と並びゐて　赤坂喬介
みたされぬもの捨てに立つ海くろき　山田凡楽
人形が僕にそむいたかほをもつ　中村草史
旅芸人軍需工場へ瞳をそらし　加茂孟浪子
からつぽのあたまをバスにゆさぶられ　和田吉郎

「入営以前」から『鈴木六林男全句集』に採られていない作のうち四句を下に挙げる。これら無季俳句を残して、六林男は歩兵第三十七連隊第二重機関銃隊に入隊したのであった。

征き残りし友らの中にわれ酔へり　六林男
旭川へ入隊の貝和陵南子を上六に送る、その時
吸殻をあゝ大阪に捨て征けり　六林男
恋愛の瞳かう〳〵と港暮れぬ　六林男

帰還兵わが飄然と乗りし汽車に　六林男

終戦の翌年四月和田吉郎・中村民雄と荒天と相対するかのごとき誌名の『青天』を創刊したのであるが、[8] 森田智子編の鈴木六林男年譜によると、『螺線』第八冊までの同人は殆ど戦死したのであった。

㈢　鈴木六林男の句における鷗外

六林男は入営三か月後中国は漢口に送られた。ここで異を差し挟んで機関銃隊を離れ歩兵となるけれども、軍隊の「余計者」として大陸を彷徨する。原隊復帰後間もなく太平洋戦争が始まった。『定本　荒天』の「海のない地図」中「Ⅰ大陸荒涼」に

追撃兵向日葵の影を越えたをれ（ママ）
雨の中軍医撃たれて地にころがる

の句が見える。前者については、「己の苦しいときは、相手もまた苦しい。それこそ息もつかずに生死をかけて追いすがる追撃兵も斃れる時が来る。この一人が何の華ばなしさもなくひそかにその生涯を終った。彼の心臓が静かにその機能を停止してもそれにかかわりなく戦争はつづき、戦闘は日夜繰り返される。旺盛な一本の植物が大輪の花をかかげて奇妙な静寂の中にあった。」と自解する。[9] この瞬時の情景と異なる点はあるものの、あのブタペスト出身の報道写真家キャパが、スペイン内戦時人民戦線派に従軍し、敵弾に当たったところを撮影した「倒れる人民兵士」（一九三六〈昭和一一〉）を思い浮かべさせる。銃を持ったまま手を広げて崩れる瞬間の衝撃的写真に通うものが認められよう。後者の句は、第一線の戦闘員ではないことにおいて、別の角度から戦場の非情を捉えており、「ころがる」の表現が、人を「物」であるかのごとくに感じさせる。『荒天』のあとを受けるような書題の『雨の時代』（東京四季出版、平成六）に、「キャパ展の遺影のキャパよ日焼けして」、「地雷踏む直前のキャパ草いきれ」の詠があるが、その精神からするとおそらく偶然ではない。「窓外雨粛々／渺茫とした／雨の時代を撃つ／酷烈なる俳句精神」（句集の帯の評言）は海外にも向けられた趣がある。

四

「兵燹や太古のごとき夕まぐれ」、「ねて見るは逃亡ありし天の川」その他の戦場俳句を脳裏に刻み、「大陸に別るる雪の喇叭鳴り」の一句を残して六林男は海を渡り、南方戦線の一つルソン島に上陸した。『定本　荒天』の「死と倦怠の記録1」には、

いつ死ぬか――樹海の月に渇きゐる
月明の別辞短し寝て応ふ
射ち疲れキニーネなりわかち嚥む
深夜砲声斥候に行くと飯喰ひゐる

などとある。『螺線』によって送られた俳人のこれらの句中に次の作を発見する。

遺品あり岩波文庫「阿部一族」　六林男

小谷砕壺の『琥珀』昭和十七年（一九四二）十二月号に、本名で載った「バターン半島攻略戦記」と題する句の一つであって、当時高橋重信・林田紀音夫ら強い印象を受けた若い俳人は少なくなかった。初出誌上でこれに接した桂信子は、「もろもろの戦争俳句のなかで、この句が強烈に私の胸を打った。」と往時を回想し、[10] 三橋敏雄には、「事実は、戦死か戦病死かは知らず、いったん仆れて立たぬ戦友の遺品に、一冊の「岩波文庫」を見いだす。しかも、それが森鷗外の「阿部一族」であったことを、わが身に引きつけて思い、かつての所持者の身分証明を果たそうとする、悲惨の一句」とし、そこに「自他の深層心理」への鋭い切り込みを読む発言がある。[11] 立原道造に、大きさ・軽さが快適と言わせたような当時の岩波文庫が、戦死者の所持品としてあるのを六林男は鋭く捉えたわけである。厳密に言えば「阿部一族　他二篇」となっているこの文庫本は、初版を昭和十三年五月に印刷しており、斎藤茂吉の解説を付していた。『中央公論』（大正二・一）に掲載の当該小説の梗概は、「肥後熊本城主細川忠利の家隷に阿部弥一右衛門といふ者が居つた。忠利の死んだ時、忠利の許を得て殉死した者が十八人も居たのに、弥一右衛門は忠利から殉死の許を得ることが叶はなかつた。この小説は、殉死の許を得なかつた事が原となつて、つひにその一族の滅んで行く悲劇を描写したもの」とまとめてある。

こうした歴史小説を詠み込んだ一句について大岡信は、

この句には、「悠久の大義」に殉ずべく死んでいった人の、最後まで大事にもっていた本が『阿部一族』という小説だったという皮肉がある。日本軍人の基本精神に対する大きな疑問が、所持品のなかにあった。この文章が壮絶な戦いの遺品となることで、戦争が二重写しになっている。それが無季俳句であるこの句に芯を与えていて、戦争の無情と無惨を物語っている。この場合、抒情性をともなってしまう季語はむしろない方がよい。この句は鈴木六林男の代表作として、いつまでも残る句である。

と解する。[12] 無季俳句の強味にも触れていて間然するところがなく、「阿部一族」についても、「一族が孤立していき、最後には一族全滅の悲惨な運命が待ち受けている」（傍点引用者）という筋の展開に言及がある。その「全滅」のイメージは、一句の場合にも肝腎な点として捉えることができるであろう。「苛酷ともいうべき無言の時空」が「凝視の効いた即物把握」によってリアルに現前しているという佐藤鬼房の鋭い評言も、[13] 一冊の書のもたらすイメージの句の核心をよく捉えている。鬼房は、六林男が南京で初めて会い、「会ひ別る占領都市の夜の霰」（六林男）、「会ひ別れ霙の闇の跫音追ふ」（鬼房）と詠み交わした俳人であった。なお岩波文庫について言えば、昭和九年の「馬酔木」の句会の折、石田波郷が出詠して秋桜子にほめられた「岩波文庫といへども煖房の書肆に漁る」の例があり、これには三鬼も感心したのであった。[14]

バターン半島の高地の戦闘で負傷し、弾片を終生体内に持ち続けることになる六林男は、「英霊とゆられまぶしき鱶の海」と句案して昭和十七年の夏帰還、陸軍病院や療養所に傷を養い、年末に除隊となった。「遺品あり――」の句はほぼ同時の発表で、戦後第一句集『荒天』に収められたものである。

年譜によって戦前の六林男の愛読した作家を挙げると、萩原朔太郎・中原中也・石川啄木・正岡子規・長塚節、あるいは夏目漱石・芥川龍之介・梶井基次郎・斎藤茂吉・中野重治・魯迅及びドストエフスキーであって、鷗外の名は見えない。しかし、「阿部一族」を詠み込んだ句をもって、その著者と六林男との関係は終わったのではなかった。第四句集『桜島』（アドライフ、昭和五〇）に昭和四十四年（一九六九）の作を収める「残酷な季節」の中の「Y病院にて　十七句」（実際は岸和田市の吉川病院）に

女来て病むを憐れむ鷗外忌　　六林男

がある。一体この俳人には「女」を題材にした句が少なくないが、その「女」の形象は、生々しいところがあっても、必ずしも明瞭な輪廓を伴ってはいない。松崎豊は、「謹厳冷徹であったという鷗外の忌だけに、床上に体を謹んでいる人との間にイロニイが窺われる」とし、「六林男には珍らしい忌日の句が鷗外忌だけに、やはり深い意識があるのだろうが、この句、忌日の句として、見てくれの嫌味の無いところが佳い。」と鑑賞している。[15] 句集中の前の句は、「殉死羨し西には松と中学校」である。乃木大将の明治天皇への殉死を響かせてある「興津弥五右衛門の遺書」（『中央公論』大正元・一〇）や「阿部一族」を思うとき、一句との連想が生じる。西は死者の世界の方向をも暗示し、殉死した人を記念するかのように松があって、それが校庭の縁あたりに立っていると解されようか。多くの戦友を失った心の一端を「羨し」は表しているのであろう。第五句集『国境』（湯川書房、昭和五二）では、「女来て――」は「殉死羨し――」の前に配されていて、二句間の連想はより結び付きやすくなったと言える。『国境』の「解題」を塚本邦雄が担当し、一句について次のごとく記す。[16]

何故か六林男と鷗外は奇妙なアンサンブルを示す。かつての「阿部一族」の悲痛な奏効をも含めて、私はそれを訝しみ、同時に羨む。慰問の客のあやふくなまめかうとする刹那、鷗外の翳がそれをほろ苦く阻む。そのくせ「女」はあくまでも女、母でも妻でも、ましてゆかりうすい行きずりの人でもあり得ない。「漱石忌」「紅葉忌」「一葉忌」「秋声忌」「泡鳴忌」その他いづれでも成立することはしよう。だが当然のことにそこには六林男の姿はない。鷗外忌は七月九日、（中略）浅草は酸漿市、大阪は生国魂夏祭、病者の浴衣に汗が臭ひ、外には痩せた朝顔の一輪も咲いてゐよう。その暑中のしどけないたたずまひを「鷗外」はしづかに平手打する。師走九日の漱石忌ではこの味は生れまい。十月三十日の紅葉忌もつき過ぎる。六林男はさしたるたくらみ

もなくこの句をなしたのだらう。だが才能とはそのやうなものだ。天成の言語感覚とは、生れながら俳諧に選び取られたことを意味する。

六林男と鷗外とのかかわりの捉え方とともに、「しづかに平手打する」の評言は妙である。第八句集『悪霊』（角川書店、昭和六〇）の、多くは昭和五十年の作にかかる「一人だけの大学」のパート中の句

キャンパスに唐手の女声鷗外忌　六林男

の場合も、学問という点をおさえれば、所と鷗外とは結び付きやすくなるが、唐手の女声との取合せには、塚本のいわゆる「しづかな平手打」を思わせる、独特なものが感じられる。「女声」が焦点を結ぶ作の解釈に際しては、六林男による三鬼の句についての考察が参考になろう。三鬼の『変身』（角川書店、昭和三七）所収の一連の作に注目したこの弟子は、『ヨハネ福音書』を踏まえて、三鬼は、「生命」であり「存在の証明」である「言葉」を、「声」に出し「叫び」をあげはじめたと読み解く。[17] すなわち「吹雪く中北の呼ぶ声汽車走る」、「月明の船中透る母呼ぶ声」を引き、「呑気な心構えでは、対処出来ないのが、彼をとりまく世界の仕組みであることを、書き込むために『変身』の時間が準備された」とし、その第一の方法が「声」であり、それは言わば「もの」となったと述べる。そうであれば、六林男句中の「女」にとって、「もの」としての声は自己の存在証明の方途であったことになる。三鬼に「女声」という用例はないけれども、六林男には、「剣と怒りに抗うに似る女声のみ」（『第三突堤』）があり、「マラソンをはげます女声欲情し」（『悪霊』）がある。声は女の力でなければならない。唐手の一句は、新時代の到来を大学・女性に捉えていて、鷗外と女声との言語的衝突の表現に新鮮味が認められよう。

この作家のイメージを読書・執筆・学問と関係づけるならば、

この頃は視力おとろえ鷗外忌　六林男

と句案してもおかしくない。これを収める『王国』は昭和五十三年、俳人五十九歳の時の刊行であった。年齢的、身体的寂しさをまとう句と言える。

昭和四十一年七月北九州に旅し、小倉では鷗外の旧居を訪ねた。後年の句集『雨の時代』には

雄にある雌伏のあわれ鷗外忌　六林男

が見える。鷗外は第十二師団軍医部長として、明治三十二年から三十五年にかけてこの地に勤めた。数え年三十八から四十一の時のことで、左遷意識を抱き西下して耐えたのであるが、上掲二句とはまた異なるイメージを提示する。生物学的に、また社会的存在として一つの宿命性を持つ「雄」「男」を鷗外に代表させた作であり、「雌」の文字との対照、「あわれ」の語を配して一種の抒情性を醸し出している。悲哀の情をいくらかは帯びるが、湿潤性はそれほどなく、他の作家とは異なる精神・身体・存在の堅確性を彷彿させる中での句意が思われ、鷗外忌を拉し来た、塚本邦雄のいわゆる俳諧における天成の言語感覚はここでも力を発揮した観がある。

「阿部一族」を詠み込んだ句以外鷗外関係についてのものは、すべて忌日の句であるが、その時々に個別の事象を詠みながら、生命的にも、ふと日常性を破るものを覗かせて人や人世における断片の真に触れるところがある。最後の句集となった『1999年9月』（東京四季出版、平成一一）に鷗外に触れた作はないけれども、その存在は関心を引く対象であったらしく、『鈴木六林男句集　鈔抄集』（芸林書房、平成一四）中、三鬼と並んで四句を数えるのである。

六

二　茨木のり子における鷗外

㈠　茨木のり子における鷗外の文章

「阿部一族」を繙いて強烈な印象を受け、文章・散文というものについて考えをめぐらせた詩人に、茨木のり子がいる。初め『万葉集』を愛読したというが、鈴木六林男の七歳下で大正十五年（一九二六）父の勤務地大阪で生まれた茨木は、鷗外をどう受容したであろうか。

愛知県の女学校二年生のころというから、昭和十五年あたりと思われるが、図書室で少ない本の中からふと手にしたのが「阿部一族」であったと振り返る。[18]「封建時代の陰惨さ。運命をひきうける阿部一族の剛毅さ。」を描く「性格悲劇」でもあり、村八分にも関係する「日本の精神風土」を衝いているというテーマもさることながら、受けた感動はもっと別のところ

にあったような気がすると打ち明け、それは、「これが散文というものか」という一事にあったと語る。「まるで感情を交えないような淡々とした叙述に終止していた」けれども、「言葉の選択は精妙に働いていて、ただの史実の記述のみにはとどまっていない。」と記し、次のように述べる。

沈着、冷静、簡潔。
物足りないくらいのそっけなさだが、この文章全体の香気はいったいどこから発散されてくるのだろう？
活字の虫みたいに本好きの子供だったので、それまでにも手当り次第に雑々と読んでいた。漱石、中勘助、佐藤春夫、吉川英治、林芙美子、吉屋信子、横光利一、それらに比べても鷗外の文書は、ずばぬけていいと感じられた。（中略）
それ以来、鷗外のものは割合読んできて、そのせいか人の散文を判定する底には、鷗外の文章が規準というか物差しというか、ともかく絶えず存在し動いてきた。

右の読書体験について、「十五歳くらいの小娘が、とふりかえってみて思うのだが、」と記した後、「しかし鷗外風に書こうとか擬えようとしたことは一度もなかった」し、また「真似ようにも真似ることかなわぬ高度なもの」であり、ともかくも「自分は自分の文章を書かねばならぬと思い定めていた」と顧みる。「鷗外が好きだからと言って、それが唯一無二と思ったわけでもない」が、「原体験」として、書く場合「なるべく明晰に曇りなく、と私を引き据えようとするもの」に、鷗外の散文が確かに存在したというのである。

この「明晰に曇りなく」という茨木における文章作法の要諦をおさえるとき、「二人の左官屋」（『自分の感受性くらい』花神社、昭和五二）を書いたことには納得しやすいものがある。東と西の職人に題材を得て、長髪に口髭の若い左官屋とチャイコフスキイが旅の途中で出合った、民謡を口ずさんでいる左官屋とのことをうたった詩である。第一連で前者の仕事着を「油断のならないいい感覚」とほめ、

足場にやってきた彼
窓ごしにひょいと私の机を覗き
「奥さんの詩は俺にもわかるよ」
うれしいことを言い給うかな

と記す。「櫂」同人の川崎洋は、モームの挿話を挙げて、「あなたの作品を通読したが、一度も辞書の厄介にならずに済みました。サンキュー」としたためた一読者の手紙を引き、「そのとき、文学者として、これ以上の喜びはないと思った」という、この米国の作家の言葉を紹介し、もって詩友の喜びを推測する。[19] 左官屋の歌にうっとりし、「やにわにその場で採譜した」というチャイコフスキイのことから、その職人の身なりに想像を馳せる詩行で擱筆するが、言語的感覚や審美感にも思いを及ぼしたのであろう。こうした詩中の一行を書いた茨木のり子の場合、言語感覚にかかわる点では、どこかで鷗外と契合するところがあったに違いない。

この問題を取り上げるとき、資質において相通ずるものがあったと考えてよいのではないか。五連から成る四行詩「部屋」（『R3』昭和五九・一）の第一連と第三連とを引くと

簡素な机
木の寝台
糸ぐるま
床の上にはたったそれだけ

今までに見た
一番美しい部屋
不必要なものは何ひとつない
或る国のクエーカー教徒の部屋

とある。鷗外の場合も、観潮楼のたたずまいは極めて簡素なものであったらしい。原稿も無罫の紙に鉛筆か鉄ペンで書くことが少なくなかった。ある人が鷗外の漢文に唐宋名家の体裁のないことを問うたとき、いわゆる八大家の文章の特色を述べてから、それらは「漢以前歴代文章の辞句簡潔命意自然にして、強作故造の跡なく其意の深遠なる」に及ばないと評し、「余の漢文は凡て達意を主として体裁に拘はらず」と答えたことが想起される。[20] 茨木が、その文章を「沈着、冷静、簡潔」と捉えた書き手は、口語

文も同様の態度で草したであろう。「鷗外の散文がいいのは、口語体であっても文語体に等しい骨組みを持っているからではないか。さらに遡れば彼の深い漢文の素養へと至るだろう。」と述べたのは、おそらく肯綮に当たっている。創刊の詩誌についての「「櫂」小史」中[21]、初めて茨木のり子の筆名（本名三浦）で『詩学』に投稿し、一篇も採られなかったら詩を書き続けていたかどうか、と語り明かしているが、その際の選者村野四郎は、鷗外の、特に口語訳詩を、自分の古典とした詩人であった[22]。この一事は、如上の茨木と言語感覚において、どこかでつながりのあることを示唆する。この女流詩人が、後述するように、自らのいわゆる〈平熱の詩〉に傾倒する資質も、鷗外を好む点に関係があるであろう。

書く場合明晰性を心がける精神は、人とのコミュニケーションということを重んじても不思議ではない。発信と受信との言語活動に関心を寄せる茨木の第一詩集は『対話』（不知火社、昭和三〇）であった。所収の同題の作品について川崎洋は、太平洋戦争中の米軍機の空襲の夜、「灯火管制の闇で輝きを増した星と、ネーブルの白い花が交歓するのを実感した」少女は、作者自身であるとし、「戦争というホモ・サピエンスの愚行をまるで超越した大自然の次元で、詩人だからこそ感得したポエジー」と批評する[23]。「地と天のふしぎな意志の交歓を見た！／たばしる戦慄の美しさ！」の詩行があり、下のごとくその世界は閉じられている。

あれほど深い妬みはそののちも訪れない
対話の習性はあの夜　幕を切った

第二詩集『見えない配達夫』（飯塚書店、昭和三三）収載の同タイトルの作品や第三詩集『鎮魂歌』（思潮社、昭和四〇）の、特に「りゅうりぇんれんの物語」にも、対話への希望をうたうところがある。昭和三十三年北海道の山中で発見された一人の元華人労務者劉連仁の帰国までの、想像を絶する軌跡を詩化して表現したものであるが、山野を逃げ隠れして生活する主人公と一人の子供との遇然の出合いを描写する場面がある。しかし、言葉は通じなかった。詩のタイトルの表記はこれに関係があるであろうが、モーリヤックの文芸理論やマーテルリンクの戯曲その他の例を持ち出すまでもなく、この子供は詩人の分身と釈って間違いあるまい。成長したその後の若者の心中は、

幼い日の　あの交されざりし対話
あの隙間
いましっかりと、自分の言葉で埋めてみたいと

と書かれている。作品「対話」同様、右の長篇の詩も戦争に起因する事件によった。このような対話的契機は、茨木の詩に見えつ隠れつしながらその根底を流れているものである。著書『詩のこころを読む』（岩波書店、昭和五四）で、テーマにもよるが、他の詩人の作を引く場合も例外ではない。

「美しい言葉とは」（『図書』昭和四五・三）の一文においては、「言葉の発し手と、受け手とが、ぴたり切りむすんだ時、初めて言葉が成立するという秘密を、あますところなく伝えてくれている」作品として、鷗外の「最後の一句」（『中央公論』大正四・一〇）を挙げ、「全身の重味を賭けて言葉を発したところで、受け手がぼんくらでは、不発に終り流れてゆくのみである。」と主張する[24]。父親の生命を救うため自分たち子供の生命と引き換えることを申し出た小娘と、その言葉をしっかりと受けとめた奉行とを描いた小説から、「言葉を良く成立させるための、条件があるらしいのだ。」と記している。鷗外の歴史小説を引いてのコメントである。しかし、茨木にとって鷗外は、文章表現・言語表現の問題に限られる作家ではなかった。

(二)　茨木のり子・鈴木六林男の作中のルオー

茨木のり子の知られた作品の一つに、昭和三十二年（一九五七）二月『詩文芸』に発表、翌年刊行の『見えない配達夫』に収めた次の詩がある。

わたしが一番きれいだったとき

わたしが一番きれいだったとき
街々はがらがら崩れていって
とんでもないところから

青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき
まわりの人達が沢山死んだ
工場で　海で　名もない島で
わたしはおしゃれのきっかけを落してしまった

わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかった
男たちは挙手の礼しか知らなくて
きれいな眼差だけを残し皆発っていった

わたしが一番きれいだったとき
わたしの頭はからっぽで
わたしの心はかたくなで
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき
わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた

わたしが一番きれいだったとき
ラジオからはジャズが溢れた
禁煙を破ったときのようにくらくらしながら
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

わたしが一番きれいだったとき
わたしはとてもふしあわせ
わたしはとてもとんちんかん

わたしはめっぽうさびしかった

だから決めた　できれば長生きすることに
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのように
ね

女性の青春の美しい、またとない時間を、あたら戦争によって失った、というよりは、奪われてしまったことの痛ましさを感じさせる作品で、戦後最もすぐれた反戦詩の一つと解されよう。同じ作者の「根府川の海」（『対話』所収）には、右の「わたし」と視点的にほぼ重なる時期と言ってよく、「ほっそりと／蒼く／国を抱きしめて／眉をあげていた／菜ッパ服時代の小さいあたし」という詩行も見え、『螺線』同人の一人が、時代の只中から自己を「からっぽのあたま」と揶揄した句と同表現も上掲詩にはある。「わたし」が、自らも軍国少女であったと打ち明ける詩人の分身であること記すまでもないが、いま関心の対象としたいのは、作中のルオーである。四行詩の中で最後の連だけは三行のところへ、「ね」だけの一行を加えており、それだけの重みを持っているわけであろう。この詩については、渡辺善雄のすぐれた論に従って読み進めることとする。

茨木のり子は、昭和二十八年（一九五三）東京国立博物館のルオー展を見て、魂をゆさぶられたという。[25] 掲出詩はそうした経験をも反映しているのであるが、展示には同年版の銅版画集五十八葉の『ミゼレーレ』*Miserere Serie*もあった。それは黒と白とによる、「ルオー芸術のあらゆる主題が集中的に現われ、非情な自然、過酷な社会、戦争、不正、罪、苦悩、死などの人間の悲惨にキリストの慈愛が対比されている作品」（中山公男）である。戦争を告発しこれを糾弾する精神が、詩人の心にも深く響いたのであろう。渡辺は、ルオーGeorges Henry Rouault（一八七一－一九五八）の画風の変遷をたどりながら、このフランスの画家を、「人間社会の悪と悲惨さを見つめ、それに抵抗し、救済を求めた」人と捉えて、「ルオー爺さんのように／ね」の行を解釈した。[26] すなわち「ルオーのように地獄をく

ぐり抜け、闇と苦悩の世界から美を創造するような生き方がしたい」のだと「わたし」の心中を忖度する。最終連は、そういう画家に託して絶望から再生する自身の生き方を表明したものと読み取り、「茨木のり子の詩はさわやかだが、」と批評し、詩人が全く当たっていると認めた「その根は暗い」という評言を示したのであった。

ところで、『見えない配達夫』が刊行された十七年後の昭和五十年五月、鈴木六林男は倉敷市に大原美術館を訪れて五句を獲た。第一句は「白昼の寂と夏めき油彩の中」というもので、詩化の作用がはたらいていたとしても、入館した時刻、展示場の状況・雰囲気や展示品に見入っている自分の心のたたずまいを表した句と読むことができる。続く四句を引こう。意識して季語を入れた句の多い『王国』収録の作品であるが、この俳人の場合、季語といっても、それは四季・自然を表すというよりは状況を表すためのものであった。

ルオーの〈道化師〉今も横顔鳥雲に

下闇にあらず暗暗青木の眼

註　青木……画家・青木　繁

わが少女手のひら汗してピカソの前

新樹憂し漢(かん)の石像何を待つ

上来の追求との関係からルオーを詠んだ句を取り上げたい。この年の展示品については、館によれば当時パンフレットの類を作成していなかったというが、まず『道化師（横顔）』*Clown* (*Profile*)（一九二六―二九）の前に立ったのであろう。画中の道化師の視線・眼差しは、太くて黒い線で描かれ、大きく見開かれた横眼によるものである。鋭いとは言えないが、人間・事柄・情況の本質、あるいはこれを観る人たちをも一瞬見逃さないような、深さを思わせる精神からのものであることを感じさせる。横顔であることによって、この場合、圧迫感のない深みの下、それはいっそう効果を表している印象を与える。六林男がルオーについてどの程度の知識を有していたのかはわからない。参考として、たとえば昭和三十六年初版で、以後版を重ねたベルナール・ドリヴァル著、高階秀爾訳『ルオー』（美術出版社）によると、画家自身の「お前の痩せた形骸に、／無気力に腕を垂らしているな。／そしてもっと清らかな地平を見るのだ。」の詩のように、「道化師こそは楽観主義の範であり、試練の中でも、ルオーの説くこの訓えを守ることのできる人なのである」。そして、この芸術家にとって、「理想の化身である道化師は、それ以上にまた「選ばれた仲間」、精神の同胞でもある。」と述べ、ルオー自らの「人々は私に道化師と教会の人の微笑があるという。『ミセレーレと戦争』の大銅版画の冒険の中には、たしかに道化師がいる。苦悩にみちた道化師が―。」という言葉を紹介し、さらに論を進める。

つまり道化師とは、ルオーにとって、単に彼自身の一部であるのみではなく、それ以上に「人間」の象徴そのものである。他人からは理解されるが、自由で、無欲で、勇敢で、つねにみたされぬ思いを抱いている「人間」、けっして希望を失わず、希望することによって人生と運命とを支配する「人間」の象徴なのである。

『道化師（横顔）』も、こうした存在を描いたものであろうと思われる。[27]

それが、六林男には戦後三十年の、いや当の作品が描かれて以来「今も」如上の眼差しをもって、画中からこちらを見ているのであった。倉敷に遊んだ年の秋の出版にかかる『定本　荒天』の後記で、従軍した三年間は「人間性喪失」の連続であったが、収録句はその期間の「かすかな灯」であったと記す。そして昭和二十四年の初版を引き、「最初の「荒天」の後記の終りに〈齢三十。僕の荒天は尚続くであろう〉と書いた。あれから二十数年たつたが、ぼくの荒天はなおつづいている。」（傍点引用者）と宣言する。ルオーについての句中の「今も」は、この場合の「なお」と重なるものでなければならない。道化師の視線・眼差しは、それを感じさせ、第三句の「青木の眼」は、その傍証になるはずである。

一句の下五は、仲春の季語であって、「春、北方へ帰る渡り鳥の群が、雲間はるかに見えなくなることを季語として固定させたもの」で「鳥雲に入る」の略した形であり、[28]暁方の雲には使わないらしい。『螺線』第八冊の赤坂喬介によると、六林男はもともと雲を好んだようで、このことも句の視線にはたらいたと思われる。松本たかしに「鳥雲に身は老眼の読書生」、野見山朱鳥に「胸の上聖書は重し鳥雲に」があり、六林男にも「声若く男

を叱る鳥雲に」がある。この季語は「鳥ぐもり」に通じるとあるが、安住敦の「また職をさがさねばならず鳥ぐもり」、石原八束の「稿料を待ちがて顔の鳥曇り」、そして、六林男の「鳥曇ややにぬかるみ蕎麦屋の前」等と併せ考えると、句中の道化師は、そのような「鳥雲に入る」空といった状況の下こちらを見ているのであり、澄み透る季節におけるそれではない。そこには時代・社会を見る批判的精神が反映していて、地獄のごとき戦場、続く〈荒天〉の下に生きるこの俳人のことを思わせる。第五句で「新樹憂し」と詠んだ漢の石像ともつながるものが感得されるのである。

ルオー展において茨木のり子は心を深くゆさぶられたというが、六林男は第四句で、ピカソに見入り手のひらに汗して立ちつくす、関心の少女を捉えている。展示品は館の蔵する、痩せ細り手も異様に長く感じられる食卓の男女を描いた『貧しき食事』（一九〇四）であり、あの壁画『ゲルニカ』（一九三七）とモチーフを同じくする、スペイン内乱の惨禍を描いた『フランコの夢は嘘』（一九三七）であったと推定できる。後者は『ミゼレーレ』の世界に通ずる銅版画であったことも関心をそそり、『道化師（横顔）』の眼差しの向けられているところでもあったであろう。

大原美術館での五句をこう解釈するとき、また茨木の詩へと連想は移る。『食卓に珈琲の匂い流れ』（花神社、平成四）はIとIIとのパートに分かれており、いわば個に向けられている観のあるIに比し、IIからは視線が外側に、広く世界に向けられた観があるという印象を受ける。そのIIに「ルオー」がある。すなわち

強い線が
少しも厭らしくはない
あなたの描いた基督なら
部屋にあっても邪魔にはならず
むしろ鎮静させてくれるだろう
絵を見てゆきながら
題名にも目が走り

と進み、次に二段下げで「黒いピエロ」、「ミゼレーレ」、「母たちに忌み嫌われる戦争」、「辻々に売春の灯がともる」等々二十一行が続く。いずれもルオーの絵のタイトルである。そして段はもとに戻り、

題名をばらばらに呟けば　それすらも
詩よりもはるかに詩になっている
参ったなァ
久しぶりに　そう四十年ぶりに面会した
ルオーの自画像の
形のいいおでこよ！

と詩は結ばれている。[29] このフランスの画家は茨木にとっても「今も」であったと解することができる。「わたしが一番きれいだったとき」との呼応関係が認められることもとよりである。

(三)　茨木のり子・鈴木六林男と戦争作品

六林男の『桜島』にも、戦争に関する句は多い。冒頭「兵士の顔」は第一句に「父の後姿に残る戦争泉の辺」が置かれ、続く「遠景」のパートには、「戦争が通ったあとの牡丹雪」、「戦争が戻ってきたのか夜の雪」がある。ここでの遠景が、時間的契機を含むこと言うまでもない。「傷痍軍人会館にて」、「被爆の橋」等々の句が並ぶ。それらの中に

市バスにもう坐っていた――従軍僧　　六林男

を見いだす。軍隊には様々な職種の人が召集されたにせよ、かつて「墓標かなし青鉛筆をなめて書く」と吟じた俳人にとって、従軍僧は考えさせられる存在であったに違いない。一句は、そうした従軍僧が突如日常生活の中で脳裏に甦って来た場面であろう。僧個人ではなく、そのような職種の人までも召集した戦争への批判が現れた句にほかならない。無季の句であることも、この一事に関係している。「もう」は、僧職の身の人が急遽入営のために車中の人となったことへの意外性、驚きの情を表した語である。句集『悪霊』にも、「**皂莢**（さいかち）とあり天を航く従軍僧」の句を収める。軍隊という一種閉鎖的な集団における人物についての作で、「皂莢」はマメ科の落葉喬木であるが、ゴシックは「陰語」と注記する。男性にかかわるものであって、ゆがんだ形で生活せざるを得ない状況での一齣を示唆するとこ

ろがある。

茨木に、従軍僧を書き込んだ詩はないようである。しかし、敬重する詩人山之口貘の作を引く「平熱の詩」（『一本の茎の上に』筑摩書房、平成六）の一文を見落とすわけにはいかない。

応召

山之口貘

こんな夜更けに
誰が来て
のっくするのかと思ったが
これはいかにも
この世の姿
すっかりかあきい色になりすまして
すぐに立たねばならぬという
すぐに立たねばならぬという
この世の姿の
かあきい色である
おもえばそれはあたふたと
いつもの衣を脱ぎ棄てたか
あの世みたいにおっていた
お寺の人とは
見えないよ

茨木はまず、終わりの三行を「秀逸」と評し、「かあきい色とは当時の軍服の色で、召集令状がきて、あわてて挨拶に立ちよった知人の僧の姿である。」と注解する。「きのうまでの僧衣や袈裟をかなぐりすてて、たちまちに兵隊に化けてしまった滑稽さ。」と解説を続け、職業柄からすると「矛盾のきわみ」と諷刺する。そうした喜劇が悲劇に転じるとき、悲惨さ・悲しみはそれだけ増すことになろう。幼少時、小さな寒村の私も、武運長久の寄せ書きのある日の丸の旗を肩からたすきのようにかけて出征する兵士を見送ったが、戦争も末期であったためか、病身でありながら衛生兵として召集を受け、帰還することはなかった住職もいた。「戦友の弔いには便利であったというけれど、それにしても……。」と茨木は言い、このブラックユーモアはこたえると述べる。そして、誰もが高熱を発して沸騰していた当時にあって、身心ともに「平熱」を保ちえたその冷静さに脱帽するとし、山之口貘の詩の今に残る所以を明らかにしたのであった。一文はさらに続く。「昂揚感というものはいいものだが、それも恋愛とか、学問上の発見とか、仕事のよろこび、スポーツの達成感など、内発的なものに限られる。他から強制されたり操られたり時代の波に浮かれたりの昂揚感は化けの皮が剝がれた時、なんともいえず惨めである。その惨めなものを沢山見てきてしまったような気がする。自分自身のこととしても」と。

昭和六十年（一九八五）刊行の『悪霊』の「後記」で六林男は、収録作品の数に言及して、調整の目的以外に、「愛という言葉の他愛のない氾濫、明朗すぎる愛に対する私のささやかな批判がふくまれている。」と、当代への自らの姿勢に触れている。そして、「また「戦争」作品を基底にして、私の作品にそこはかとなく揺曳する虚無を指摘される評者がある。私はこれを決して否定しようとは思わない。ただ、真のニヒリズムには、厭世や厭戦とは別な意味で行動を伴った強烈なヒューマニズムが根底にあることへの配慮を怠ってはならないことを強記しておきたい。」と述べ、自身の句作の対象に関してであるべく、「戦争と愛は、綯いながら継続的でありたい。」と表明している。形式は異なっても、世に作家といわれる者のテーマは、愛・死・労働・戦いのどれかに含まれることを書いて来た、あとのことは、戦争はもちろん、海もまた……と述べたヘミングウェイの言葉を引くエレンブルクの回想記を座右の書とするという鈴木六林男。その句作活動には、茨木のり子の文芸活動も軌を一にするところが認められ、右にいわゆるニヒリズムについても、渡辺善雄が茨木の詩の根に「暗さ」のあることを指摘した一事を想起させる。そうした二詩人の批判精神には、「ヒューマニズム」で契合点が多いのではなかろうか。作品はジャンルを異にし、それぞれ独自の作風を見せながらも、戦争の時代と社会、これを内省的に受け止めて新しく真正の建設に向かうべきはずの時代と社会とに

一二

対し、ともに鋭い視線を投げかけているのである。

このような中で『食卓に珈琲の匂い流れ』のⅡのパートに収める次の詩が関心を引く。

なかった

武士道は　なかった
敗軍の将は城を枕に討死とばかり思っていたのに

武士道は　なかった
上層部の逃げ足の迅さ　残留孤児は老い去りて

武士道は　なかった
神州清潔の民は　もっとも不潔なことをした近隣諸国に

武士道は　なかった
鷗外が外国でがんばったにもかかわらず

武士道は　なかった
在ると信じて散った若者の哀しさ

武士道は　なかった
かつて在りれんめんと続いたものならばなぜ急に消え失せた

武士道とは　古来
やくざの掟のごときものに外ならず

ところどころに消しがたく光る　金箔のかけらは
ふつうの人の　ただふつうのやさしさや　行為の跡

騎士道も　なかったわね
だからドン・キホーテが躍り出たのだ

戦争の責任を厳しく問うた作品である。書き出しの強い言い切りの表現をリフレインとした、倒置による二行の詩法は、「わたしが一番きれいだったとき」よりも、訴える形はより直截的である。武士道を「在ると信じて散った若者」には、「挙手の礼」と「きれいな眼差」とだけを残して征った若者が重ね合わされよう。詩法からすれば、「問い」（『寸志』花神社、昭和五七）も同系列に捉えてよく、筆鋒の対象の共通性が推知されるが、詩「なかった」には見えない「責任」の語がこれには用いられている。「ゆっくり考えてみなければ／いつのまにかすりかえられる責任といのちの燦（さん）」の詩行がそれである。その点からすると、「戦争責任を問われて／その人は言った」と始まる「四海波静」（『自分の感受性くらい』）も想起される。「問い」には、

いちどゆっくり考えてみなければ
思い思いし半世紀は過ぎ去り行き
青春の問いは昔日のまま
更に研ぎだされて　青く光る

とも書かれている。テーマの契合性もあって、いずれも注目すべき作品であるが、「問い」の詩同様「なかった」も、時間的、空間的視圏を広げて書いたものである。作中に、「武士道は　なかった／鷗外が外国でがんばったにもかかわらず」と記しているが、この場合の鷗外は、前述のような文章上から見た作家にとどまるものではあるまい。もっとも、文章は世界をどう切り取って見るか、いかに捉えるかということと同義のことも多く、その点では同一人物であると解釈しても、多くを誤らないであろう。いずれにせよ、詩人がこの鷗外の内包をどのように思い描いていたかは容易に定め難いが、前掲の一文から推して「平熱」の人というイメージは作動していたのではないか。留学時の勉強・活躍―ナウマンとの論争や国際赤十字の会議における通訳的演説のことも入っていたであろう―をうたっているけれども、帰国後のそれも入っていてよいと思われる。日露戦争でいわ

ゆる奉天大会戦の勝利を尋ねられ、悲惨の極みと言葉少なく答えたというが、自国を見失うことのなかった鷗外は、一方コスモポリタンとしての姿を示した観がある。晩年の鷗外を上野の帝室博物館に訪ねたフランスの一ジャーナリストの報告を、詩人が永井荷風の日記、あるいは「仏蘭西人の観たる鷗外先生」（河村敬吉編『森鷗外研究』長谷川書店、昭和二二）あたりで読んでいたかどうか詳らかにしないが、そのジャーナリストは、そういう選択もはたらいてこの帝室博物館総長を訪問したのであろうし、鷗外も訪問者のフランス語に耳を傾け、フランス語で答えたのであろう。[30] この一事と無関係であったとしても、武士道にかかわる歴史小説を書き、同時に西洋にも通じ、死の直前までも公務を全うした精神にも、茨木は触れていたと思われる。身近にあってその武士的な言動に接していたユマニスト木下杢太郎が、「先生は亦「考へる人」「判断する人」だつたのであります」と評した「森先生の人と業と」（『文学』昭和一一・六。後『臨時増刊　文芸　森鷗外読本』〈昭和三一・七〉等に収録）に、詩人は目を通していたであろうか。[31] 如上のイメージが、「雄にある雌伏のあわれ鷗外忌」の一句とどこかで交叉するところはあるに違いない。続いて

　確かな実験、正しい思索から生れた結論は、その内容が古風であらうが、日本的であらうが、少しも欧羅巴の、或は世界のユマニスムと矛盾する処が無いのであります。

　和魂漢才と云ふ語があり、又それをもちいて和魂洋才などといふ事も云はれて居ります。先生の場合には、和魂といふ言葉は決して偏狭なものではなく、亦能く世界のユマニスムと交流してゐるのであります。（傍点引用者）

と述べたような鷗外像は、詩「なかった」の中のそれと無縁ではないことになろう。ゆっくり考えてみることの必要をうたった茨木は、「わたしが一番きれいだったとき」の詩法におけるルオーのごとく、「騎士道も　なかったわね／だからドン・キホーテが躍り出たのだ」（傍点引用者）と、返す刀で西洋にも独特の鋭い切先による一撃を加えたのであった。

　上来観察したとおり、「阿部一族」と浅からぬ機縁のあった二詩人であるが、受容の内実をかなり異にしていたとしても、鷗外は関心を引く対象として意識されていたようである。それはまた、近代日本の文芸・文化及び思想の歴史における鷗外の存在を興味深く示唆している。鈴木六林男・茨木のり子を並置して鷗外との関係で捉えるとき、その詩精神が時代・社会の諸相やわれわれの現代的課題を相剰的に照らし出すところがあるであろう。

注

（1）森田智子「鈴木六林男略年譜」（『俳句研究』昭和五一・九）参照。
（2）西東三鬼「新興俳句の趨向について」（『京大俳句』昭和一二・一二）であるが、『西東三鬼全句集』（都市出版、昭和四六）所収による。
（3）『西東三鬼全句集』所収の本文三八八頁参照。
（4）『頂点』（昭和四四・二）の自作自解であるが、引用は杉本雷造「虚無から愛へ――鈴木六林男と戦争俳句――」（『俳句研究』昭和五七・七）による。以下本稿で引用の自作自解はこれに従った。
（5）以下句集に収められていないものは、中林燁生「鈴木六林男論」（『螺線』第八冊）による。
（6）注（5）参照。
（7）『定本　荒天』の西東三鬼「短い序文」参照。
（8）『青天』の六林男については、坪内稔典「鈴木六林男（戦後俳人論Ⅵ）――ことばの根拠――」（『俳句研究』昭和五七・七）参照。
（9）注（5）参照。
（10）桂信子「鈴木六林男の俳句」（『俳句研究』昭和五一・九）参照。
（11）三橋敏雄「回想的鈴木六林男私論」（『俳句研究』昭和五一・九）参照。
（12）大岡信『百人百句』（講談社、二〇〇一）三六五―三六六頁参照。
（13）佐藤鬼房「『荒天』雑感」（『俳句研究』昭和五一・九）参照。
（14）注（3）の「俳愚伝」三六五頁参照。
（15）松崎豊「『桜島』の秀句」（『俳句研究』昭和五一・九）参照。
（16）塚本邦雄「地獄の新樹　鈴木六林男『国境』解題」であるが、ここでは『鈴木六林男全句集』によった。

(17) 沢木欣一・鈴木六林男『西東三鬼』(桜楓社、昭和五四) 一四三―一四四頁参照。
(18) 『現代の詩人7　茨木のり子』(中央公論社、昭和五八) 所収の「散文――鷗外の文章に触れて」によったが、初出は『国語通信』第二三六号〈一九八一・七〉である。その後の『一本の茎の上に』(筑摩書房、一九九四) 収録のものを見ると、副題はなく、現代口語文を評して「骨なしくらげである。」のセンテンスを本文中に入れてある。
(19) 注 (18) の最初の書の解説一五九頁参照。
(20) 山田弘倫『軍医としての鷗外先生』(医海時報社、昭和九) 三七六頁参照。
(21) 『現代詩文庫20　茨木のり子詩集』(思潮社、一九六九) 所収。他に「二兎を追いはじめた頃」(『現代詩手帖』昭和三四・一一) 参照。
(22) 清田文武「村野四郎における森鷗外の詩業 (上)」(『芸術至上主義文芸』15、平成元・一一) 参照。
(23) 注 (18) の書の川崎洋の鑑賞文一三頁参照。
(24) 茨木のり子「美しい言葉とは」(『図書』一九七〇・三) の本文は注 (18) の前者の書によった。
(25) 渡辺善雄「茨木のり子とルオー」(『日本文化研究所研究報告』31、一九九五・三) 参照。この論文には「東京展陳列作品目録 (CATALOGUE)」も紹介されている。
(26) 注 (25) 参照。渡辺には「茨木のり子ノート」(『三重大学教育学部紀要』35、一九八四・二) や「茨木のり子ノート」(上) (下) (東京法令出版『月刊国語教育』一九九三・四、一九九三・五) がある。
(27) 新潟県立万代島美術館編集『大原美術館展　モネ、ルノワールから20世紀美術まで』(新潟日報社、二〇〇四・九・一一―一〇・一七) の作品解説には、この画について次のようにある。

《道化師 (横顔)》は、(中略、引用者) ルオーが殊に好んだ主題である。派手な衣装をまとって人々を笑わせる陽気な道化師も、その華やかな仮面の奥に、どれほど悲しい、辛い素顔を隠していることか。無限に優しい、哀愁を湛えた彼の道化師の大きく見開かれた眼は、あらゆる虚飾をはぎ取った人間の本性とも言うべきものを、まざまざと物語っているように思われる。「われわれ人間はすべて道化師にほかならない」というルオー自身の言葉も、彼のそのような人間観を反映しているだろう。ルオーは、道化師のなかに、人間そのものの条件を見ていたのである。(高階秀爾執筆の再録)

(28) 水原秋桜子・加藤秋郷・山本健吉監修『カラー図説　日本大歳時記』(講談社、昭和五八) の山本健吉・飯田龍太執筆項目・用例を参照。
(29) 詩の解釈については注 (25) 参照。
(30) シンポジウム「今なぜ漱石か―帰朝百年―」(平岡敏夫・半藤一利、コーデネーター清田文武) (『文学・語学』第一七六号、平成一五・五) の清田の発言参照。
(31) 木下杢太郎が文中で言及した事柄に鷗外の「北清事変一面の観察」(明治三三・一二・二、第十二師団軍医部での口演) があり、中に、「古の十字軍が欧洲列国の風俗習慣に大変動を起したるは、著名なる開明史上の事実なり。今の欧人に一種の武士道ありて、独にRitterlichと云ひ、仏にChevalesqueと云ひ、英にKnightlyと云ふは皆当時の遺風より出づ。」とある。長谷川泉編『現代のエスプリ　29　森鷗外』(昭和四七・一) 収載の木下杢太郎の「森鷗外の文学」(本文中に掲出の『森鷗外研究』長谷川書店) を詩人は読んでいたであろうか。杢太郎と「ユマニテ」の語とについては河野与一『新編　学問の曲り角』(岩波文庫、二〇〇〇) 一八三頁参照。

附記　年号の表記については便宜的に本文では統一したが、注においては刊記のそれに従った。本稿投稿後、鈴木六林男氏の死去 (二〇〇四年一二月一二日) が伝えられたので、校正の段階で文章に手を加えたところがある。本稿で従軍僧について私の記憶をも書いたが、後藤慶昌氏のことで、押見虎三二本学名誉教授の令弟であり、去る六月に死去した亡父と同年生まれであったという。論中の前記お二方のご冥福をお祈りし、かつ従軍僧について、ジャワ戦線から終戦後帰還した叔父三国允の教示を受けたことを記して謝意を表する。